



特 250

633

散史著

停

十

錢

獨軍の

英本土上陸戦

獨英勝敗の分岐点  
いつ上陸する!!

東京情報社

始





特250  
633

城北散史著

英本土上陸戰

東京情報社





## 目次

- 一、益々紛糾する大戦……………(三)
- 二、ドーヴァを越える日……………(七)
- 三、上陸戦の成敗……………(一三)
- 四、奈翁とヒ總統……………(三三)
- 五、國際政局の前途……………(四四)

# 英本土上陸戦

城北散史

## 一、益々紛糾する大戦

「歲月流水の如し」と古人語り、今人に膾炙されてゐるが、支那事變は五年目の年を迎へ、第二次歐洲大戦は三年目に遣入つた。

先の第一次大戦は五ヶ年で終結したが、こんどの大戦は、三年で終るのか、五年かかるのか殆んど解らない。加之、米國の動きが益々國際的波動を強からしめ、バルカンの形勢が益々紛糾を重ねる。

一方、極東の形勢はどうかと云ふと、これは歐米の各國としては、第二次的の性質であるけ。



四  
れ共、現代の如くに、國際關係が接近してくると、歐洲は歐洲、米洲は米洲、東亞は東亞と區分して考へることは出来ない。

それで、日本の國內的にはそうでなくとも、國際的には、日本の動向も随分と注目されてゐる。

佛印、蘭印に對する日本の態度が各國、殊に英米注目的であることは、今更述べるの要はない。

最近、シンガポール軍港を米國が使用權を受けるだらうとか、英米合作の太平洋諸島又は要塞の強化が、日本包圍陣を形成するとか、濠洲の首相が、「太平洋形勢の重大情報」を言明したと云ふ様に、目まぐるしい、重々しい風雲が枚擧に違がない、

こんな「風樓に滿つ」と云ふ様な不安な國際關係は、いつどんな青天霹靂が起るのか、それ程でなくとも、暗雲がいつ風雨に變るか解らないと云ふのが、各國人の現状である。

x x x

x x x

野村吉三郎大將は、日米國交の重大使命を帯びて、遙かにワシントンに使した。

彼は、赴任の日、あの巨軀を、稍小柄できかね氣の面魂の松岡外相と、肩を並べて東京驛を歩みつつ何事か語つてゐたが、胸中どんな成算があつたか？

彼は、ホノルルで、桑港で、驅逐艦や司令官の歡迎を受け、空前であつたが、ワシントンではあまり書き立てる程でなかつた。

が、舊友ル大へ領と膝を交へて、日米國交打開にどんな効果を上げるか、暫く外電を待つことにする。

とにかく、野村ルーズベルト會談が好く行けば、歐洲大戰は世界大戰とならず、帝國の理想とする「八紘一字の外交」が、何かの曙光を見るかも知れない。

晴れるのか、曇るのか、風を呼ぶのか、雨降るか、ここ一寸豫測を與へず傍觀の外ない。

x x x

x x x

以上の如き國際環境に於て、今次大戰の進展上、極めて重視され、各自各國人等しく注目す



るのは、英獨勝敗の分岐點——分岐點と強く云ふのが悪ければ「勝敗の重點」でもよい——とせられる「獨軍の英本土上陸戰」である。

この上陸戰が、成功すれば、とにかく英本國を征服することが出来る。然しそれで、英國が降伏するかどうかは別である。

一部では、獨軍が英本土を占領せば、英政府は、その老大な海軍と共にカナダに逃避して長期抗戰すると云ふ説もある。が、大體英國の敗けと見てよい。

もし英本土上陸戰が早く行はれるとなれば、米國も參戰することを控へるであらう。従つて戰禍の世界的波及も防げる譯けである。

極東に於ける情勢も自ら緩和されて、英國は反日の力もなくなり、米國の對日強硬策は加減されるであらう。

之に反して、獨軍の侵入が不成功に終れば、英露の決戰は長期戰となり、米國の援英は強化され、參戰の恐れさいある。佛國ヅイシー政府は動搖する。バルカン、ソ聯の動き、南太平洋の暗雲低迷となつて、戰亂と不安な國際情勢は大なる變化を來す。

これ等の大動搖、右するも、左するにも、獨軍の上陸戰に重點があるのであるから大體の觀察を述べることにする。

## 一、ドーヴァを越える日

一體、獨軍が、トーヴァを越えていつ英國に侵入するか？

スペインの大皇帝であつたヒリツプ二世の無敵艦隊も、大奈翁も、先の獨帝ウルヘルム二世も、侵略することの出来ない金城湯池ならぬ無敵の島國英國に、いつヒットラーは上陸するか

この問題は、昨年六月佛國降伏頃から世界の話題となり、七月、八月、指顧の間にあるドーヴァの霧晴れて、海靜かな時に行はれるなどは、最も有力な説であつた。

然しそれは行はれなかつた。秋風が音づれて、冬となつても、上陸説は行はれた。本年になつてからは、一月説、三月説、其他紛々であるが、いつ行はれるか？ 却々解らな

5。



世の報ずる所では、獨伊、英米の觀る所は、次の様である。

【獨逸】 ドイツは結局對英本土上陸まで行かなければ駄だといつてゐるが、實のところドイツ新聞は一切沈黙を守つて僅かにD N B通信が興味本位の觀則を報じてゐるに過ぎない、そこで各方面の情報を集めてみると大體二説ある。

春季説 そのうち春季節の理由をきかう。

一、アメリカの對英援助法の通過を契機に漸次實際上の參戦にいたる可能性が濃くなり、よしんば正式參戦せぬまでもアメリカ最近の行動は外交的、政治的にヨーロッパ新秩序建設を妨害してゐるからドイツはできるだけ早く英本土を撃ちアメリカの干涉の餘地を一掃しなければなるまい。

二、バルカンの南方諸國は樞軸參加を躊躇する傾きがないではない、また地中海アフリカ方面の戦局打開は今のところ藉すに時日を以てする外あるまいからこの際英本土上陸以外にない

夏季説 これに對し夏季または初秋説

一、ドイツはあせることはない、この夏候その他の條件が許すぎり／＼まで政治的軍事的

にひた押しに押した上で最後の手段をとる、この對策として潜水艦戦を一層活潑化しイギリスへの物資補給路に徹底的脅威を與へ軍需工業地帯に間斷なき打撃を加へ、これでイギリスが屈服しない場合はじめて上陸を執行しても遅くはない。その方がドイツの拂ふ血肉の犠牲が少い實際問題としてイギリス攻略が再びこの秋に持ち越し歐洲が三度戦争の冬を迎へることになるとイギリス自身は別としてヨーロッパの食糧難は相當深刻化し獨伊の統制にも好ましからぬ影響が生じるだらう、だからこの際英本土を撃つことが局面轉廻の王手筋だとみてゐるのだ、このためにこそドイツは半歳餘にわたつて着々準備を整へて來たのだ、なほここに注目すべき一つの見方を添へておかう。

ロンドン陥落後イギリス政府がカナダか漢洲に移つてアメリカと共同して依然抵抗を續ける場合ロンドン攻略の成功はヨーロッパにおける戦局の一段落とはなつても戦争は更に大陸間の抗争にまで擴大されるだけだとの論もあつて、するとソ聯の動向が問題になる。そこに潜在的な妥協論が擡頭して思はざる轉換を見せることなしとは誰も保證は出來ないといふこと。

【伊太利】 ドイツ軍のイギリス攻略はとりもなほさずイタリア軍のイギリス本土上陸になる



わけだが、イタリア人の各人各説の論をきくと、

◇ナチ政権記念日のヒトラー總統の演説から見ると英本土上陸戦は豫想外に早い

◇天候が悪く霧のある方が作戦には有利だ

◇いや、天氣の良い時でないとな陸はむづかしいよ

◇リビアでイギリス軍を破つてからでないとな英本土上陸はやらないよ

◇リビアよりバルカンを先にやるだらう、その後で或ひは同時に上陸作戦とくるのが順當だ

◇イギリス本土は水も洩らさぬ防衛ぶりだといふから先づ搦手のアイレに上陸と出ると思ふ

ね

◇ヒトラー總統は神經作戦を狙つただけで結局上陸はやらないんぢやないだらうか

◇結論はヒトラー總統が「この春には猛烈の潜水艦戦が始まるだらう」と言明してゐるから

春以前に英本土上陸戦が始まるやうなことはないといふ事だけはいへるだらう。

【英國】ドイツはとどのつまり對英上陸をやらないだらうといふ説が希望だけでなく相當根強い理由をもつてゐる。

ヒトラーは何でも慎重にやる男で十分自信がなければやらない。フランスの崩解後半年以上を経た今日イギリスの防備は見違へる程完全に近いものになつた。萬一ドイツが失敗したとき國內的國際的に與へる打撃をおもんばかつて何か奇想天外な新戦法でも發見されない限り本土攻略をやる時期はなくなるだらう。そのかはりバルカンや地中海でイギリスに致命傷を與へ英本土に對しては潜水艦と飛行機による封鎖を強化するだけであらうといふのである。

しかしドイツが窮極の勝利を得るためには本土を占領するより外ないから如何なる犠牲を拂つても上陸作戦は必ずやるといふ論が強い。時期は三月中旬から四月、そしてアメリカの援助が大規模とならぬまへに早くかたづけねばならない。その際はドイツの兵力は三百乃至三百五十の潜水艦と水雷艇、一萬五千の飛行機、五千の船舶、これをもつて遮二無二海峡を渡り三分の二以上の犠牲をやるだらう。政府はドイツ軍の上陸を覺悟したものか近く敵の侵入を受けられた場合市民はいかにすべきか」と題する警告と注意書を印刷各家庭に配布する。

【米國】アメリカがいつ戦争に参加するかといふ問題とドイツのイギリス本土上陸とは表裏一體の關係にある、まづアメリカ参戦の觀測からはじめる。



アメリカの争戦に關する歴史をみると殆んど四月にはじまつてゐる、例へばアメリカ革命は四月十九日、メキシコ戦争は同廿五日、南北戦争は十五日、スペイン戦争は廿一日、前世界大戦参加は六日だ。

そこで今度の戦争も四月に参加するかといふことになり、その前にドイツはイギリスに上陸するだらうといふことになるのだ。

アメリカの打診で一番目前に迫つてゐるとの説によればアメリカのイギリス援助に先手を打つて國民への約束を履行し去年の秋以來特にこの目的のために訓練して待機中の軍隊をいつ迄もこのままにして置くことは士氣を損ふ虞もある、これに對しまだ後のことだとの説、アメリカの軍需増産が本格的となるのは本年以後のことだし、アメリカがイギリスに武器を貸與する船と軍艦を動員してゐない限りイギリスの防備が強化されるはずと先のこと、それよりも地中海のイギリス艦隊を撃破して海を抑へ同時に英米航路を封鎖して本土攻略にかかれれば犠牲も少くて済む、だから地中海の戦績如何が問題の時期を決する鍵だとの見方が多い。

以上の様な譯けで、各國夫々の立場から考へられたものだが、こんな所である。

### 三、上陸戦の成敗

英本土上陸戦の成敗は、ヒットラーの浮沈に關する計りでなく、英獨の勝敗、日米ソの動向にも大影響を與へるものであるが、ヒットラーの胸中の秘策は果してどんなものか？ 此は吾人の豫測の外であるが、世界の人々は、本年度中に、戦争を決定することを、ヒットラーは考へてゐると想像する向がある。

その理由として、去る一月三十日ナチス政權獲得八週年記念日に、ベルリンのシュポルトバラストに於ける一時間四十分の大演説の折に

「一九四一年は大歐洲新秩序建設の歴史的な年となるであらう」

と語つたので、これ即ち、獨軍の英本土上陸を意味し、戦争の終結を示すと云ふのである然し、一方から見れば、如何にヒットラーは偉大でも、一個人である、獨逸一國ならばまだしも、相手のある戦争を自分の思ふがままに決定することは出来ないから、演説の通りに行く



かどうかは解らないが、少くとも、彼の希望する所であると見てよい。

従つて、英國上陸戦は一つの問題である。獨逸が、この戦の勝敗を決定するには、矢張り上陸戦で、英國人の鼻を折らなければならぬ。ここに重點がある。

如何に空軍がロンドンの空を征服した、爆弾で、ロンドンの半ば焦土と化したとか、潜水艦で、英商船を撃沈して、英國の糧道たる海路を鎖したとしても、徹底的でない。どうしても歩兵の上陸に依るを第一とする。

されば、その上陸戦はどうなるか、時期の豫測は前に記述したから、次に上陸戦そのものの性質を語ることにする。

某紙は、次の如くに論述した。少し引用が長いが、参考迄に記述する。

「世界大戦は果して今年中に終結するか？ 吾々は勿論、ドイツ總統ヒトラーの言に信頼し、一九四一年を以て世界新秩序發足の年としたい、新秩序建設に向つて國運を賭してゐる樞軸國家の民衆は一人残らずそれを欲してゐるのである、然し、果して、吾々が希望する如く事態は易々として進捗するだらうか？ 現實はいふまでもなく樞軸側に有利に展開してゐる、アメリカ

カの要路者がしばしば言明するやうにデモクラシー國家の運命はまことに危機に臨んでゐるのである。しかし、彼等が、必要以上に、危機來の叫びを擧げつゞける心理の裏側にはどんな事實が隠されてゐるだらうか。それは今日誰でもが知つてゐる——デモクラシー擁護のためにアメリカは遂にけつ起するだらう、といふことだ、資源に恵まれ、國力の充實を自他共に認めるアメリカが持てるイギリスと共に起つて持たざる樞軸側を、一步一步と危地に追迫しよとしてゐることだ。

近代戦は即ち國家總力戦である。最早戰鬪力のみ素材な計量は勝敗豫測の決定力を持ち得ないのだ。かのフランスの敗北も所詮はその原因を國家總力の弱體に求められねばならぬ。

かくして世界大戦の歸趨は依然として電撃作戦か、長期戦かに懸つてゐる、疾風迅雷のスピードイナ壓倒力が持久と粘着に堪へようとする豊かな國力を撃破し得るか否か、獨、英爭覇の判斷がこの一點を他所にしては、遂に何物をも語り得ない所以は茲にあるのだ。

ヒトラーば國民大衆に向つて、大戦は今年中に終結するだらうと叫んだ、これは單にヒトラー總統の強氣に終らしめてはならぬ。ヒトラー總統また胸中固く持するところがあるに違ひ



ない。然らば、ドイツは如何にして一擧に持てる國イギリスを倒さうとするのか。上陸作戰以外に、何らの方策があるのだろうか？　そしてそもそも上陸作戰に可能なのだろうか？

ヒ總統の演説——一九四一年は世界新秩序の出發の年とならう——は、ドイツが今年中に大戦を終結しようとして希望してゐることを實證した、戦争を好んですべきものではない、已むを得ず始めたとしても一刻も早く終りにしたい、しかし、只、休戦を願ふのは敗戦主義とすこしも變らない、或は似非平和主義者のタハゴトに過ぎない戦争は斷じて勝たなければならぬ、勝利のラツバの音と共に幕を閉づ可きだ、ドイツが戦争終結の早かんことを願ふのは、勝利を一刻も早く迎へようとする事だ、戦ふ者はつねにこれを欲してゐるだらう。

だが、吾々はあのヒトラーの演説を読み、歡呼して、これに應へたドイツ民衆の姿を想像する時、ある種の感慨なきを得なかつたのではなからうか、ある種の感慨などと曖昧の云ひ方はすまい、それは持たざる國の嘆聲に外ならぬのだ。

勿論、ドイツの戦備は二年や三年の戦争ぐらゐでへたばりはしないだらう、石油、ゴム、これだつて相當豊富だらう、豊富だからこそ乾坤一擲の戦端を開き得たのだらう、だが戦争は先

づ消費を前提とする人、物、金——これ等總てに互つての消費なしには、どんな戦争もあり得ないのだ。

この消費を犠牲にしてこそ平和も、生産も招來されるのだ、だからドイツがどんなに豊富な資材を準備してゐても無限の戦争に堪へられぬのは自明の理だ、ルーマニアの石油を獲得しても、またソ聯が或程度の補給をしても、さては又ポーランドの鐵、デンマークやオランダの食糧などが足しになるとしても依然として、貯藏量の遑源は免れないのだ、これに較べて英國はどうであらう。背後に尨大な植民地を擁し緊密にアメリカと提携してゐるイギリスが、持てる國である事に變りはないのか。

そこに當然ドイツが持たざる國の嘆聲を發しなければならぬ事由があるのだ、今年度に於ける戦争終結を斷乎として宣言したヒトラーの胸中は果して以上の如き嘆きが聲なき聲として湧き起つてはゐりなかつたらうか？　吾々がヒトラーの演説に強氣を感じ、ある種の感慨を禁じ得なかつたのもまたこの嘆きを、まこと、身近に聞き得るからなのだ。

さて然し持たざるドイツの嘆きはそれのみに止まるか止まらないか？　吾々は、外國の事情



に就いて之こそ正確無比だといふ確信を一つとして抱き得ない、凡ては新聞報道を通じて（而も政治的）な類推するより外はない。ところで、ここに一つの類推が生じ得る、それは傳へられるヨーロッパ大陸に於ける食糧飢饉である、飢饉が誤りであるとすれば、食糧生産高の低下なのだ、その説をなすものは理由として云ふ——オランダ、デンマークは豊かな農業國だが、肥料は總てカナダ、アメリカから仰いでゐる、これが杜絶した結果、農産物の生産は極度に低下した、その上に戦争による土地荒廢がある。

戦争は平時に比して或割合で食料需要が増加する筈だ、これでどうして食料饑饉が起り得ないだらうか？ と、云ふまでもなくこの論據は甚だ薄弱である。

しかし尙依然として樂觀は許されない、事態は樞軸側のみならず幸ひしてゐるのではない、何故なら戦時に於ける民衆心理は動搖を伴ひ易い、これもドイツ一國のみであつたら士氣は却つて昂揚するであらう問題は占領地域を拡大に擁してゐることなのだ、戦争が永びいた場合、占領地域が平靜を持し得るだらうか？ フランスは、ラヴアルの復活によつて危機を脱け得たけれども、尙未だ釋然たり得ないのではないか？——ヒトラーの胸中に以上のやうな考慮がめぐら

されてゐるだらうことは容易に考へ得ることなのだ。

かくて獨逸は速戦速決を希望する何によつてか？ 他なし、英本土敵前上陸で、元來、作戰に於ては敵前上陸を至難中の至難とする、ドーヴァー海峡が幅員僅か廿一哩（八里半）に過ぎないとしても、それは依然神業に類することなのだ。ドイツは如何にして之に成功しようとするのか？ まづ吾々はドイツ空軍の優秀なることを知つてゐる、然し、英軍の執拗さ強靱さにも眼をつむる譯にはゆかない、フランダーズから三十萬の英兵が撤退出來たのは、天候の悪化に幸ひされたと云ふよりも、寧ろ英戦闘機が果敢さが、獨逸空軍によく對抗し得たからではなかつたらうか？ 誰しも知る如くドイツは海軍力に於て徹底的に英國に劣つてゐる、されば獨逸空軍による制空が可能であるか無いかが今次大戦の鍵を握ると云はれ來つた從來の豫測は、この敵前上陸に際してもまた云ひ得る筈なのだ、ドイツは、クリスマスに到るまで英本土爆撃に於ては、銳意都市ロンドンを叩きつけたが、漸次軍需工場に爆撃目標を移しつつある。それは一に英國空軍勢力の永久的壊滅を意圖するからなのだ、しかし、ここに到つてドイツの大障害となるものにアメリカの援英強化がある。



今、議會で論議されつつある「武器貸與法案」が通過した曉——それは三百億ドルに値する武器だといふ——所謂船舶の交戦國への立入が自由になり得るし、獨潜水艇に對抗するための驅逐艦も俄然増強されるだらう（昨年アメリカより讓渡された五十隻の驅逐艦は前大戰の時建艦された半廢舊艦だが、最近英戰艦と新造米驅逐艦との交換が考慮されてゐると云ふ）そして、米空軍の積極的増加が不可避となる以上、獨空軍による制空權獲得は多大な困難を伴ふのだ。

一日の遷延は一日の不利を招來する、ドイツはドーヴァアの濃霧を衝き突如として電撃戰を敢行するか？ それにしても英本土席捲のためには少くとも、卅萬の兵力を輸送しなければならぬとしたら、それは何と困難なる作戰であらう——獨作戰本部は果して如何なる手を擁してゐるのだらう？

さつとこんな記事である。これでも、上陸戰の容易な冒險でないことは解る。

尤も、ドーヴァ海峡は、最狹部は二十二哩、セルブールからクライストチャーチで六十五哩前者は一時間前後、後者は三時間半前後で渡れる。佛國北岸の長距離砲は、海を來る英艦隊や

英海岸を攻撃することは出来、相當に、獨軍の上陸海を掩護することが可能であらう。

だが、ここは、マチノ線と異り海であると云ふことを記憶しなければならぬ、とにも角にも、制海權は英海軍にあることは認められるから、假令に一時的に上陸しても、後方との連絡をたたれることは、上陸軍の致命である。

それに、兵隊のみ上陸したのでは戰は出来ない。戦車も、人馬も、武器彈藥等一切の陸揚げが必要だ。

英國は今や一大要塞島と化してゐる。ドーヴァの海岸は斷崖である。英國の軍需品は米國の援助の下に不足してゐない。兵員も二百萬人、三百萬人とあると稱するから、愈々上陸の攻防戰が行はれたならば、空に海に陸によつて、空前の上體的戰が、驚天動地と行はれて、とて、三百數十年前の關ヶ原に於ける油斷のならぬ徳川家康と石田三成の軍勢との天下分目の戰の比であるまい。

海軍々人が海上戰略の上から見ても、英本土の上陸は、容易でないと論ずるが、ラベなるかな!! 昨年の七月から現在迄に、流石獨軍も決行せぬのである。



然し、昨年の蘭白佛の戦迄は、いつ蘭白を侵すか、マチノ堅壘は破れまいと云ふ豫測や噂さで八益しかつたが、あんな情態になつた。  
英上陸戦も、これ以上に議論した所で詮方ないから、先づ此の邊で筆をとめて置く、あとは外電で情勢を待つことにする。

#### 四、奈翁とヒ總統

軍事評論家の石丸藤太氏は、奈翁とヒットラーに關してこんなことを述べた。

「奈翁は、フランスの運命を決する最後の敵はイギリスであることを知悉してゐた。それはヒットラーも同様である。……中略……かくてナポレオンは平和を望みながらも、ただ騎虎の勢にかられて、イギリスと戦つた。それは恰もミュンヘンの對英威嚇に成功したヒットラーが、ポーランド問題で、イギリスは戦はざるものと輕視し、ナポレオンの二の舞を演じたのと同巧異曲である。……中略……」

ナポレオンは、政策上諸國を蹂躪した。それは今日の獨逸と同様である。勿論ナポレオンは被征服國民の感情を尊重し、文明的施設によつて、その屈辱を忘れさせようとしたが、亡國の悲憤と、奈翁に對する敵愾心とは、永久に之を消滅することは出来なかつた。

かくて、ナポレオンに依つて抑へられてゐた武力の壓迫が弛めば弛むほど、諸國は奈翁から背叛したり、これが奈翁を仆す本とつた。

當のフランスに於ても亦民心に變調が生じた。ナポレオンの勝利は赫々たる間は、フランス人は、之に眩惑されて盲従したが、戦争が長引くにつれて、平和を希求し、奈翁治下の戦亂を厭ひ、奈翁を見限るに到つた。

以上の如くにして歐洲大陸の征服王ナポレオンは没落の運命をたどらしめた。彼の故智を學び、相似たる原因を有するヒットラーは、果して奈翁の失敗を避け得るか？ 同じ原因は同じ結果を生むものとするれば、彼、ヒットラーに依て率ゐられる獨逸の運命も相當注意すべきである」

と論述した。



だが、この話は、ヒットラーが、奈翁同様の没落を辿ると云ふ意味ではなく、只、情勢に於て甚だしく相似たり、故に、ヒットラーたるもの、敢て前車の轍を踏むなかれと云ふのであらう。殊に、論者石丸氏は反英的の評論家であるから、反獨的の記事ではない。

又、ヒットラーに、奈翁の轍を踏む多少の危険はあつても、百有餘年前の奈翁の時代と現代とは、時の隔りがあり、武器、戦略の相異があるから、奈翁を移してヒト總統に擬するには必ずしも當るまい。

只、吾人に教へるものは、英國の征服し難く、上陸戦の容易でないことを物語るのである。

## 五、國際政局の前途

世界環視の中心たる英本土上陸戦に對して、粗雑ではあるが一通りの感じを述べた。

この英獨決戦が、米國に影響し對英援助の變化となり、日本の東亞建設に微妙に動き、ソ聯の動向にも關係するであらう。果して、英本土上陸の攻防戦は、火花を散すであらうか、將又

封鎖戰術其他の方法に依るか、又は、國際和平の中に意外な變化が生じて、戦争の終局を早めるか、とても豫測は出来ない。

只、現在、吾人の感得する範圍内では、世界和平戦局の治まることの、極めて、困難なるを知る。

この時局に立つ國民は官民一致協力して、國家百年の大計に進む外ない。

x x x

x x x

近衛首相は、去る帝國議會で、「事變の責任者は私であります」と涙ぐましい答辯に依て非常な感激を與へた。

「事變の責任」元より當時の首相たる公の双肩にもあるが、これは決して、公のみの責任ではない、一億國民の等しく擔ふ所である。吾人は却つて、公が戦時首相として時局に立ちつつあるを多とするものである。

去る議會で、某氏が、



「日清、日露の戦役には、戦争勃發當時の首相が、終局を結んで居る。然るに、支那事變は數代の首相が代つたが、首相の所見如何？」と質問した。

然し、これも見方である。日清戦役の首相は伊藤博文公であつたが、日清戦争は明治二十七年八月に宣戦し、翌二十八年二月に威海衛を占領、四月に下關講和が成立した。約七ヶ月間である、豊島沖の戦から數へても八ヶ月である。こんな半歳の戦に内閣の代らないのは、當然である。況んや、戦勝の極めて容易で、單純であるに於ておやだ。

日露戦争はどうか、明治三十七年二月から八年の九月迄で、これは一年餘である。時の首相は桂太郎公だが、これも代らなかつたのが當然である。

支那事變の如きは、その性質からしても、時代から見ても、同様に論ずることは出来ない。首相の代るのは、好ましくないが、事變勃發當時の首相が、日清、日露戦同様に終局迄やめるなどはチトどんなものかと思はれる。

首相責任論は、公の前記通りの答辯もあり、これ以上の論議の必要もない。

× × ×

× × ×

翻て、國際政局を凝視するに不安の一路を辿ると見るの外はない、その情勢に就ては、今迄の記述で大體了解の事と信するが、二、三の記述せぬことを附加して置きたい。

その一つは、國境問題で戦争に迄なつた佛印對泰國の紛争調停に日本が乗り出し、目下東京で、松岡外相主催の下に協議中の事である。

今日本の國際的地位は大部高まつた。然し歐米の雄國に比しては、未だ微弱だと云ひたい所もある。

最近、米國外交界の出來事を見てもすぐ解る。

例へば、英國から新たに駐英大使に任命されたハリハックスが、米國に赴任すると、ル大統領は、港外迄船で迎ひ出た。

こんな例は、今迄ないとのことである。成程そうであらう。一國の元首が、他國の大使を港外迄迎へると云ふのだから、慣例にあるまい。



英米が、現在どんな關係にあるとしても、この一事は、たゞことだとは考へられない。  
然るに、一方我が野村大使はどうか、ル氏と廿有餘年の格別親しい友人だと云ふのに、ワシントン着に、大統領の出迎も、ハル長官の出迎もなく、その着任は、新聞に特筆大書もされな  
し。

この一事で、英國と日本との國力の相違輕重を語るのは早計だとしても、慥に一斑を知ることになる。

然るに、日本が、佛印と泰國との紛争を調停するのは、根本に於ける日本の勢力が、漸く世界的になつたことである。國際間で、紛争の調停國となるのは、よ程の勢力がなければ出来ない。例へばクリミア戦争の調停國となつた佛國の奈翁三世、露土埃英の紛糾に仲裁して伯林會議を開いた獨逸の正直な仲買人ビスマルクなどは、何れも當時歐洲に於ける最優位にある國の元首又は有力者である。

日露戦争の協停者はゼオドル・ルーズヴェルト大統領で、その蔭には時の獨帝ウルヘルム二世もあつた。

こんな譯けで、國際紛争の調停國及び調停者は、偉大な勢力を有するものに限られる。小さくとも、佛印對泰國の調停者となつたことは、たとへ歐洲大戦中で、英米等他を顧みるの暇なきものとしても、日本の勢力がどう成長したかを明にしたものとしてよい。

吾人は、かくの如き日本の國際的勢力が益々健全な發展を遂げ、八紘一宇の國策が、やがて各國に及し、同時に、亞細亞民族の白人植民地化を防遏することを望むものである。

x x x

x x x

其他、日支事變は、英米の現有勢力の持續される限り、當分解決見込の薄いこと、蘭印問題も難局にあること、野村駐米新大使の使命はどうなるか等々、日本を中心とした國際情勢も却々難かしい。

これ等のことも、英本土上陸戦の成否と大關係を有するので、この點から見ても、我が國民は注意を怠る譯けに行かない。

もし日本にして、佛印對泰國の調停に成功し、野村大使に依る日米親善が持續されるならば



獨り世界の平和の爲めに喜ぶのみならず、帝國の爲めに慶賀してよい。

だが、吾人の最も憂慮するのは、重慶政府の抗日のやまないこと、野村大使の努力があつても、日米關係の打開出来ぬ折、歐洲の大戦が、米國及び極東迄波及せんとすることである。

一步誤れば、世界は大混亂に落入るのである。この難局を未然に防ぐのは、英國の態度が、獨伊の出方、將又日米の努力か、

その何れにしても、日本は米國と共に極めて重要な役割を負擔すると考へる。

世界人類の平和の爲めに、日米國交の協定者野村大使の自重と、ル大統領の平和政策とを希望して止まない。

併せて、蘭印に折衝する吉澤大使の健闘を祈る。

x x x

x x x

原稿を書き終ると、松岡外相は、世界平和の爲めに戦争調停の意ある旨のメッセーヂを英外相イーデンに送つたとのことだ。

これは佛印對泰國の調停國となつた以上の大問題である。

日本が世界大戦の調停者となつて、帝國の王道を世界に布くとは、考へても偉大なことである。吾人は無限の感慨にふけらざるを得ぬ。

もし日ソ米の三大國が歐洲大戦の調停に立たば、大戦も平和に克復するであらう。

吾人は幾多の感想あるも餘白なく、他日に譲りたい。……………(終)



414  
395

東京情報會員募集

- 一、會員は一年参圓を納付す、月二冊の本社パンフレットを送附す。
- 二、時事、人事、一般の質問に應ず、但し質問者は返信料送附のこと。
- 三、御申込は會則賛成の上入會の旨記入郵便爲替にて會費参圓封入本社へ御申込み下されば新刊パンフレットを送附致します。多数の入會者を望む。

東京市淀橋區諏訪町一〇一  
東京情報社

編輯後記

今や國際政局は、英本土上陸戰の如何に依つて動かされんとしてゐる。それで、この問題を中心として一小冊子を送ることにした。何卒讀者の御後援を祈る。

前に出した日米戰爭論は案外好評であつた。又「日ソ國交」もジリ／＼とよい。これ等は皆國民の國際關心の反映であると思ふ。感謝と共に一言して置く。…一記者

三二

有所備版  
英本土上陸戰  
定價十錢  
(送料三錢)

昭和十六年二月卅日 印刷  
昭和十六年三月十日 發行

啓者 城北散史

發行人 東京市淀橋區諏訪町一〇一番地 大沼廣喜

印刷所 東京市小石川區戸崎町九六番地 中橋印刷所

發行所 東京市淀橋區諏訪町一〇一番地 東京情報社

啓者 社

厚生書院 新正堂(大阪)

【次取大】



東京市日本橋區江戸橋二丁目八番地

太陽生命保險株式會社

電話日本橋(24) 三一七五番ヨリ  
三一七八番マデ

終